



# みなとからの風

〒231-8682 横浜市中区新山下3-12-1 / TEL 045-628-6100(代)  
http://www.yokohama.jrc.or.jp/

●発行：2017年9月 医療連携センター

## Contents

- 人間ドック健診施設機能評価の認定を取得しました  
～個別化予防の確立をめざして～ …… 1
- ハイブリッド手術室システムの導入 …… 4
- 感染症診療について …… 2
- カスタマーリレーションセンターについて …… 4
- 冷凍カテーテルアブレーション治療法 …… 3
- iPadによる外国語通訳について …… 4

## 人間ドック健診施設機能評価の認定を取得しました ～個別化予防の確立をめざして～

### 健診センター長 伊藤美奈子

横浜市立みなと赤十字病院開院1年後の2006年4月に私が専任医として着任以降、人間ドック健診施設機能評価の受審を目標に努力を積み重ねてまいりました。そして2017年6月に認定を受け、長年の目標を達成することができました。

日本人間ドック学会は「疾病治療とは異なる予防医療の実践を通じて、保健・医療における人間ドック健診の役割を確立する」ことを機能評価事業の理念に掲げています。当院が特に高い評価を受けた項目は、活発な啓発活動と良好な地域との関係、各科専門医の充実による健診の質の確保、積極的な学術活動による有用な健診の確立への貢献、確実な結果説明などでした。

近年、個人の健康志向が高まり、健康寿命という言葉もよく耳にするようになってきました。病気になる一歩手前の「未病」という概念も少しずつ国民に浸透し、健康管理に対するさまざまな取り組みを行政や企業がを行っています。また、がん検診受診率も着実に増

加し、がん対策の評価指標として用いられる「75歳未満年齢調整死亡率」は2005年から2015年の10年間で15.6%減少しました。

こういう背景のなか、当センターは地域住民の皆様だけでなく、企業や健保組合、医療機関にも信頼され愛され続ける健診施設となることをめざすとともに、つねに予防医学の最前線で活躍したいと考えています。今後も検査の安全性や精度の向上を図ることに加え、個別化（オーダーメイド）予防の観点から個人の背景に応じた保健指導・受診勧奨を行い、疾患の予防法の確立に寄与したいと考えています。

引き続き、地域医療機関の先生方と一緒に活動することにより、地域住民の皆様が健やかな心身を保ち満足度の高い毎日を過ごすことができますように、お手伝いさせていただきたいと考えております。大切な患者さんやご家族が人間ドック健診を必要とされる際には、横浜市立みなと赤十字病院の健診センターをご紹介できれば幸いです。



人間ドック健診施設機能評価認定証



笑顔と真心でお待ちしております

# 感染症診療について

## 膠原病リウマチ内科 副部長 渋江 寧

平成29年度4月から横浜市立みなと赤十字病院リウマチ科に所属となった渋江 寧（しぶえ やすし）です。感染症専門医として院内の感染症の診断、治療に対する他科からのコンサルテーションを受けることを中心とした感染症診療を行っております。

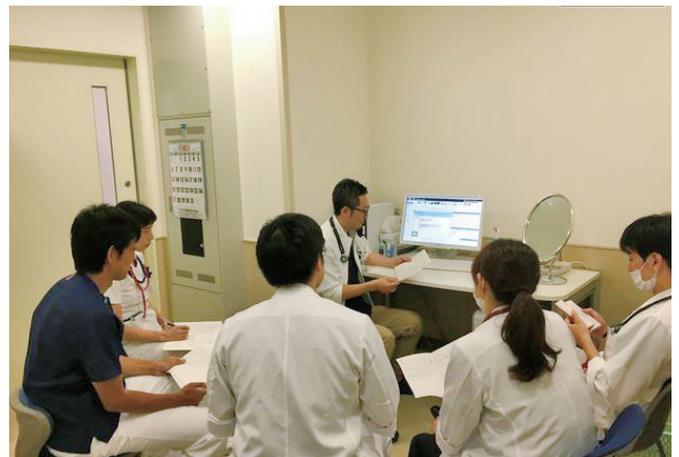
感染症は横断的な診療を要する領域であり、宿主、感染臓器、微生物の3つの相互関係を意識しながら診療をすすめていく必要があります。

例えば、発熱、咳嗽を主訴とした方が胸部レントゲン写真で肺野透過性低下を認め、痰培養から黄色ブドウ球菌が検出されたとしても、血液培養から黄色ブドウ球菌が検出されていたら、肺炎ではなく、黄色ブドウ球菌による感染性心内膜炎、それに伴う肺水腫が疑わしくなります。これは黄色ブドウ球菌が市中肺炎の起炎菌として非典型的であり、感染性心内膜炎の起炎菌として頻度が高いことが前提になっております。この場合、黄色ブドウ球菌による肺炎と判断されたとすれば治療失敗につながります。また、発熱の原因が全て感染症というわけでもなく、薬剤熱などの非感染症を考慮して抗菌薬の中止を提言することもあります。

感染症診療につきものである薬剤耐性菌の影響は近年多大であり、これに対するグローバル・アクション・プランが2015年5月に世界保健総会で採択され、日本でも2016年4月に薬剤耐性（AMR）対策アクションプランが策定されました。国内でも従来から行われてきた抗菌薬の使用規制や届出制度だけではなく、Antimicrobial Stewardship（AS）プログラムという抗菌薬適正使用を推奨する取り組みが学会から提言されました。①耐性菌を拡げない ②耐性菌を発生させないという2点がAMR対策として重要となり、①に対してはICT（Infection Control Team）としての活動が中心となりますが、②に対しては使用する抗菌薬の適正化が求められます。当院では2017年6月からAST（Antimicrobial Stewardship Team）として感染症専門医、薬剤師、検査技師が協力し、広域抗菌薬や届出対象となっている抗菌薬（ピペラシリン・タゾバクタム、カルバペネム、静注用レボフロキサシン、バンコマイシン、リネゾリド、ダブトマイシン）の7日以上長期使用例をピックアップし、担当医と抗菌薬の必要性を議論したり、培養結果から適切な抗菌薬へのDe-escalationを推奨する活動を行って治療の適正化を

図るとともに、抗菌薬に対する感受性の回復やコスト削減を目指しております。

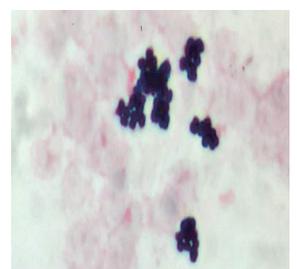
また、感染症予防の観点からはワクチン接種も重要であり、麻疹、水痘、肺炎球菌などのワクチンの他に、A型肝炎、腸チフス、狂犬病などの海外渡航前の接種が望ましいワクチンがあります。国際渡航医学会認定医（Certificate of Travel Health）として、当院でも渡航前のワクチン接種やマラリアなどに対する予防内服薬の処方、防虫対策の指導などを行うトラベルクリニックを今後展開していくことを検討しております。このような感染症診療を通して地域医療にも貢献していきたいと考えております。今後とも宜しくお願い致します。



AST（Antimicrobial Stewardship Team）のカンファレンス



血液培養陽性例のグラム染色の確認  
（写真の菌は黄色ブドウ球菌）



# 冷凍カテーテルアブレーション治療法

心臓不整脈先進診療科 部長 沖 重 薫

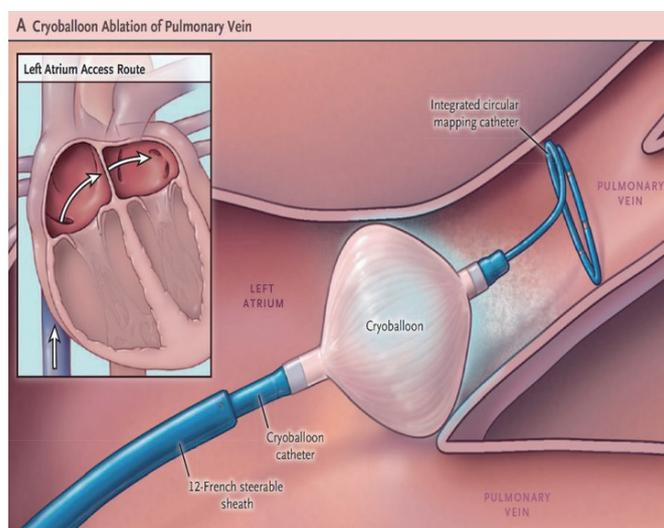
私が米国ハーバード大学医学部付属病院である Brigham and Women's 病院 (STAP細胞の小保方晴子さんが研究生を送っていたことで有名になりました) で、1992年に冷凍カテーテルアブレーションシステムの世界で初めての基礎研究に私が主任研究員として着手いたしました。その後紆余曲折ありましたが、遂に2014年7月1日から本邦に臨床導入されました。遙か22年の月日を超えて遂に臨床導入ということで当初は非常に感慨深かったです。当時、本邦における本分野の専門医がろくにいなかったのも、私自身いても立っていただけで「冷凍カテーテルアブレーション」(医学書院)を2015年に上梓いたしました。その後本年7月には二冊目の「冷凍アブレーション治療ハンドブック」(南江堂)という実践書を再び単独で上梓いたしました。この2冊の他に本邦に専門書は未だありません。というわけで、当科は本分野における「メッカ」と評価されております。また、既に他施設から80施設以上の専門医が本治療法に関して見学研修に訪れておられます。

さて、冷凍アブレーションシステムとはいかなるシステムか？

従来は、高周波エネルギーを用いまして心筋組織を50℃近くに熱することで不整脈の原因となる心筋組織を挫滅する方法が世界を席卷してきました。しかしながら高周波固有の欠点もあり臨床でもいくつかの懸念材料がありました。冷凍システムはその懸念材料のいくつかを解決できるテクノロジーではありますが勿論完璧なものではありません。すべてのテクノロジーは皆そうですが、各テクノロジー固有の長所およ

び短所をよく理解することがその有用性を最大限に生かし、かつ安全に運用する要であることは言うまでもありません。現在のシステムでは、冷凍物質として亜酸化窒素が使用されております。氷点下-80℃が本物質固有の最低温度です。これを直径数mmのカテーテル内の極細チューブ内を循環させることでカテーテル先端部位のみを選択的に超低温化します。それ以外の部位は極度の低温にはなりません。これは国際特許を獲得している技術です。また、心房細動の標準的治療でありました左右4本の肺静脈の電氣的隔離術に関しても、これまでとは大きく異なった形状である「バルーン」形状のカテーテルが生産され、非常に画期的な治療法として全世界で拡充しております。これまで「point-by-point」法といひまして、肺静脈周囲を点状に一点一点高周波通電して繋げることで連続病変を苦労して作成していたのが、「one shot ablation」と呼ばれるように、一気に肺静脈周囲を360°手術できます。高周波の場合ほどの修練を必要としません。「god hand」は必要なくなったのであります。患者がどこでも質の高い治療法を安全に受けられるようになった技術であります。勿論治療成績を上げる工夫は必須であります。当科はこの分野でも本邦で先進的な役割を担ってまいりました。

不整脈分野は、コンピューターの発達の恩恵を医療分野の中で最も受けてきた分野といっても過言ではありません。今後もハイテク医療機器が本邦に導入される予定であります。より高度の良質の医療を患者に提供できるように当科は今後も邁進する所存であります。



New Engl J Med 2016;374:2235-2245

肺静脈入り口に冷凍バルーンカテーテルを留置し、肺静脈が完全閉塞するまで押し付けた状態で冷凍開始。バルーンカテーテルと接触している肺静脈組織面が全周性に一気に冷凍壊死巣で電氣的隔離可能となる。

# ハイブリッド手術室システムの導入

心臓血管外科 部長 伊藤 智

横浜市立みなと赤十字病院では、2017年9月より「ハイブリッド手術室」の造設工事を開始します。2018年3月に完成し運用開始になる予定です。現段階で使用する予定の診療科として、循環器内科・心臓血管外科・脳神経外科・整形外科がありますが、症例の必要性に応じて全科で使用していく方針です。

ハイブリッドという言葉は、トヨタ自動車のプリウスによって一般に知られるようになりましたが、そもそもの意味は「2つ以上の異なるものを組み合わせてひとつの目的をなす」ことを指します。プリウスは電気モーターとガソリンエンジンという2つの異なる動力源を組み合わせて駆動するハイブリッドですが、手術室におけるハイブリッドの定義は、大きな広がりをもつてきたのが現状といえます。

「ハイブリッド手術室システム」とは、麻酔装置などを備えた清潔な手術室内に、3D-CT撮影も可能な高性能の据置型X線透視装置を設置し、観血的な外科手術と血管内治療のいずれにも対応できる高度な未来型手術室システムのことで、従来、血管造影室や移動型CアームX線透視装置で行っていたカテーテルを使用した血管内治療が、手術室でより清潔、安全に実施可能となります。また、観血的な外科手術の最中でも、X線透視装置の使用により立体的な血管や臓器の3次元画像をリアルタイムで作成、観察しながら、その場でステントグラフトの挿入や血管内治療の併用が可能になります。

近年、外科手術において、超低侵襲治療（Minimally Invasive Surgery）というコンセプトは、トレンドというよりも、すでにスタンダードとして受け入れられています。手術デバイスの急速な発展と、術式の開発、普及により、これまでは手術の適応を見合わせざるを得ないよう

な症例においても、安全に手術を実施することが可能となってきています。このような超低侵襲治療を行う上で最も注目を集めているのが、「ハイブリッド手術室システム」といわれるコンセプトです。

心臓血管領域においては、高齢化社会の進行に伴って増加する大動脈弁狭窄症に対して、血管内からアプローチして弁の狭窄部分をバルーンによって開大し、折りたたんだ人工弁（生体弁）を大動脈弁の位置に移植する方法、経カテーテルの大動脈弁置換術が実施可能になります。すでにこの方法は、国内で保険適用され、ハイブリッド手術室システムの設置が実施施設の条件となっています。これにより当院においても、経カテーテルの大動脈弁置換術が実施できることとなり、今後、ハイブリッド手術室システムを活用して高度で安全な手術を実施してまいります



## カスタマーリレーションセンターについて

カスタマーリレーションセンター まえだ あ よ ひと  
コンシェルジュ 前田 貴 愛 人

横浜市立みなと赤十字病院カスタマーリレーションセンターは、ストレスの多い入院生活を少しでもサポートできればという職員の間にもとに、設立された部署です。8階の個室、特別室において、コンシェルジュのサポート、Free Wi-Fi、お茶、コーヒーなどの提供、選択食、朝刊の提供、有料テレビの視聴などを、料金を上げることなく提供しております。

コンシェルジュは、入院時のお出迎えから、退院時のお会計、お見送りまで、入院時のさまざまなお手伝いをさせていただきます。入院生活にご不便がないよう努めて参ります。

普段の生活と異なり、入院生活は制限の多いものとなりますが、病棟の常識ではなく、社会一般的な目線で環境を見直し、すこしでも快適な入院生活が送れるようサポートしたいと考えております。入院時は、どんな些細なことでもコンシェルジュにご相談いただければと思います。

開設から一年半が経ちましたが、新しい試みで、まだまだ至らない点も多いと思います。カスタマーリレーションセンターに関するご意見、ご質問等ございましたら、045-628-6866までご連絡いただけますと幸いです。

みなと赤十字病院、そしてコンシェルジュを今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



センター長：渡辺孝之副院長（中央）  
副センター長：清水大輔乳癌外科部長（左）  
コンシェルジュ：前田貴愛人（右）

## iPadによる外国語通訳について

外来業務課 主事 木村 祐 介

横浜市は日本屈指の国際都市であり、海上貿易の要衝である横浜港を抱えています。近年は、国際線就航本数の増加が目覚ましい羽田空港からも至近距離であり、かつ、パシフィコ横浜をはじめとする国際会議施設も数多く立地しています。とりわけ、当院が位置する元町・中華街駅周辺の地域では、他の地域よりも多くの外国人の方が居住されています。

実際に来院される患者さんの中には外国人の方も少なくありません。そこで、平成29年1月より患者さんと医療スタッフが意思・情報伝達やコミュニケーションを円滑に行えるよう、「医療スタッフへのiPadの貸し出し」を行っています。操作性と正確性を考慮し、「ボイストラ」と「グーグル翻訳」の2つのアプリケーションも使えるようにしています。現在、運用台数は1台ですが、外来や病棟でも頻りに活用されているため、同じ時間帯に予約が重なることもあります。今後、患者さんの「伝わらないストレス」を少しでも軽減するため、サービス向上委員会では複数台数の購入も検討しております。



## 新任医師のご紹介

新しく就任した医師をご紹介します。  
今後地域の先生方と地域医療の連携を推進していきたいと存じますのでどうぞよろしくお願いいたします。

\*\*\* 質問項目 \*\*\*

①診療科（専門領域） ②取得指導医、専門医 等 ③卒業大学 ④卒業年 ⑤趣味 ⑥地域の先生方へ一言！

ドイ ケンジ  
土井 賢治



- ①救急科（ER診療・集中治療）
- ②救急科専門医、内科認定医
- ③慶應義塾大学
- ④平成19年
- ⑤音楽演奏、読書、トレーニングジム
- ⑥地域の急性期医療の発展の一助になれる様、尽力致します。

マサセイザブウ  
増田誠三郎



- ①内科（糖尿病・内分泌代謝）
- ②杏林大学
- ③平成26年
- ④サッカー、フットサル、音楽
- ⑤医師として未熟ではありますが、精一杯頑張りますので宜しくお願い致します。

シノダ ダイゴ  
篠田 大悟



- ①外科（心臓・血管）
- ③埼玉医科大学
- ④平成27年
- ⑤糖質ダイエット
- ⑥多くのご紹介を心よりお待ちしております。

紹介患者さんのお問い合わせご予約は医療連携課で承ります。

電話 045-628-6365(直通) / FAX 045-628-6367(直通FAX) 受付時間 平日 8:30~17:00



横浜市立みなと赤十字病院

〒231-8682 神奈川県横浜市中区新山下3丁目12番1号  
TEL:045-628-6100(代表) FAX:045-628-6101

日本赤十字社